

工房オンセは別府市より車で30分ほど入った山里にあります。回りは緑に囲まれ、自然の恵みがいっぱいの中で手作りの伝統工芸品である、ハンドバッグや花籠、盛り皿、ランプ等の作品作りに精を出している職人集団です。大分県は日本一の真竹の生産地です。伸びが良く柔らかい真竹は竹工芸品に適しており、特に細かい細工と強度を要求されるハンドバッグには欠かせないものです。工房オンセの作品には私の名前の雅人から一文字取った、「雅」の銘を彫っています。これは真竹で編んだ国産手作りの作品である証です。現在、全国の有名デパートやギャラリー等で展示会を開催し、たくさんの方々にご愛顧いただいています。また今年も皆様のお近くで展示会などを開催した時はお気軽にお立ち寄り下さい。

## 研修旅行

今年の研修旅行は久留米市にある井上藍胎漆器さんにおじゃましました。藍胎漆器とは薄い竹ひごを編んで作った竹細工に繰り返し漆を塗って固め、その漆を研ぎ出し編み目を浮き立たせたもので「竹籠を母胎にした漆器」として、藍胎漆器と名がついたそうです。竹という同じ材料を扱う工芸品であり、また安価な外国で生産された品物が多い中、国産にこだわっている姿勢が私の工房と共通しており、以前から親交がありました。初めて井上社長にお会いしたのは1998年「全国伝統的工芸品展」で私の竹のバッグが入賞した時です。授賞式に呼ばれて東京に行った時、最高賞の内閣総理大臣賞を取られたのが井上さんの藍胎漆器の「提藍」でした。その時のスピーチがすばらしく、ありきたりの謝辞でなく、伝統工芸品に携わる職人達の現状や思いをたんたと話されていたのが思い出深く残ります。授賞式の翌日、私は家族でディズニーランドに行ったのですが、またそこで井上さんとぼったり出会いそれ以来なにかと良くして頂いているのです。

工場では吟味された材料の竹が山のように積み上げられ、熟練した職人さんがヒゴとり、編み、縁加工、塗りなどをもくもくと作業されていました。今は大量に売れるものを作ってもだめだと思います。直ぐ心無い業者が中国でまねた物を作らせ、国産品として消費者を騙して売ります。私たちはあまりたくさんは売れないが、本物が欲しいと思う人達に答える事の出来るもの、安心して使って頂けるものを作っていかななくてはならないとつくづく思いました。



## 海外事業展開

別府竹細工とは日本が世界に誇れる工芸品であると自負しています。まず、竹の質が世界的に見ても最上級である事、緻密な表現力、編み方のバリエーションの豊富さ、力強く材料の良さを十分に引き出した技法など、どれを取っても世界に通用するものと思っています。3年前にはパリで、2年前にはドイツで展示会を開き外国の方の反応を見てきました。今回、ジェトロ(国際貿易振興協会)の協力を得て、フランクフルトの国際見本市やミラノなどでのギャラリーでの展示会が出来るよう動き出しました。将来的にはインターネットで直接海外の方にも日本の良い物、私どもの作品を使って頂ける様、準備していこうと思っています。まず、この2月にミラノとフランクフルトへ下見を兼ねてPRに行ってきます。

春先には ICHIROYA.COM というサイトでも私の作品を取り扱ってもらう事にもなりました。世界にも、値段に関わりなく本物が欲しいというお客様はたくさん居られます。私達は価格競争だけに走るのではなく、良い物を末永く使って頂けるよう、本物が作れるような文化や感性が育つように対話をしていかななくてはならないと思っています。

昔は青竹を削ったお箸で新年を迎える習慣がありました。竹藪で青々とした曲がりの少ない美しい竹を選び、丁寧に洗い傷がつかない様に細心の注意を払い削り始めます。箸を削る作業は単純ではあるが誤魔化しの利かない技を試される作業です。切り出しナイフの切れ味、刃物の研ぎ方、削る時の力加減、最後まで凹凸のない様、竹の繊維を削っていくということは至難の技なのです。毎年、数十膳削っているのですが、本当に納得のいくお箸はなかなか出来ません。そんな私が「この箸はすごい」と思わず目を見張った箸があるのです。同じ大分県の日田地方で作っている方がいました。先端まで一分の狂いもなく美しく伸びた箸、四角のものは四角く、五画のものは五画に丸いものは丸に先端の大きさが1.3ミリまで本当に美しく仕上がっています。その上、上面に竹の表皮が付いており、塗装していないこと、この「何も加えないで自然のまま」という状態でお箸を作ることが大変なのです。竹の繊維に関係なく削っていくと後日ゆがみが出てきます。急速に仕上げの研磨をしていくと組織が痛んでしまいササクレが出てきます。塗り箸はこれを防ぐために塗料を使っているのです。私も自分がお箸を削るのでこの方の仕事の精密さや丁寧さが良く判ります。竹のお箸は軽く、滑りにくく手に馴染んでくれます。特に麺類などを食べると他のお箸は使えません。この様な良い品が多くの方に使われる事を願って止みません。

## 竹の道具1 磨き包丁

竹のハンドバッグの作業工程は、まず竹藪にある青い竹を切り出し、半月ほど寝かしておく、その後、油ヌキといって10mほどの大きな釜で茹で、拭き上げて油を取る。天日で一ヶ月ほど干し上げると、青い竹が黄色く粘りのある竹に仕上がるのです。油ヌキされた竹の表面を薄く磨き取るのに使うのが「磨き包丁」です。竹細工だけの特殊な道具です。この、磨き包丁で竹の表面のエナメル質を削り落としていくのです。その後、割ったり、剥いだりを繰り返し、巾や厚みを揃え、角を取り一本一本のヒゴを作っていくのです。出来上がったヒゴを下染めし、やっと私がよく実演でやっている編む工程に入ります。作るバッグの大きさやグレードによってさまざまな編み方に分けられるのですが、私達の仕事の6割はこれまでの材料取りです。編み上げた後、縁、手、足などを取り付けたり、本染め、柿渋、漆塗り、蠟引き、袋付けとまだまだ多くの加工をしていくのですが、一番最初の竹磨きの良し悪しが最後の作品の艶に出てくるのです。何か、これも人生に重ね合わせると考えさせられる事があります。



## 2006年 上半期催事予定 お近くの時は是非会場に遊びに来て下さい

デパート催事			
1月25~31	松坂屋本店 (九州展)	4月中旬	京都伊勢丹 (職人展)
2月22~27	新宿伊勢丹本店 (大九州展)	4月下旬	千里阪急 (日本の職人展)
3月15~21	横浜高島屋 (九州展)	5月中旬	相模原伊勢丹 (職人展)
3月21~28	宇都宮東武 (九州沖縄物産展)	5月17~22	静岡松坂屋 (職人展)
4月12~18	遠鉄百貨店 (九州展)	5月19~21	三越本店 (特選和食器売場)



大分県宇佐市安心院町萱籠1167 (有)竹工房オンセ  
〒872-0723 Tel&Fax 0978-48-2027  
Email takae@cronos.ocn.ne.jp 高江 雅人